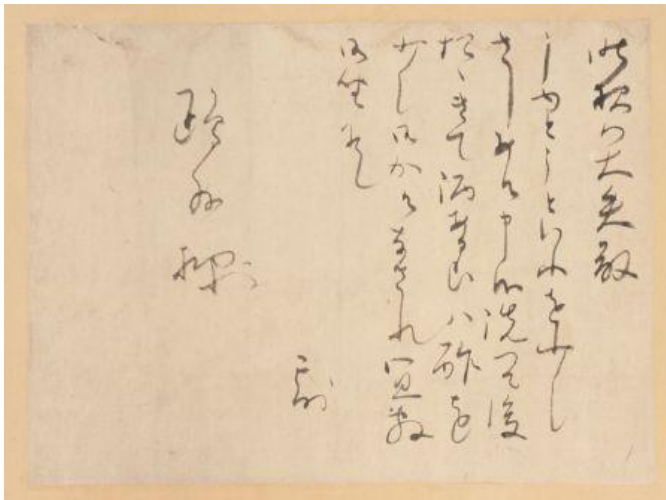


特別展『谷根千“寄り道”文学散歩』では、谷中にゆかりの文人として幸田露伴を紹介しています。露伴は、明治23年～明治26年まで谷中の銀杏横丁に暮らしました。その頃書かれたのが、『五重塔』です。谷中のシンボルとして親しまれていた天王寺の五重塔（昭和32年焼失）をモデルにした作品です。露伴は原稿を投函する道すがら、毎日のように五重塔を眺めていたといいます。

展示資料の中から、露伴が鷗外に宛てたちょっと気さくな1通を紹介します。

○幸田露伴筆鷗外宛はがき[明治23年2月頃]（文京区立森鷗外記念館蔵）

食通・お酒好きと知られる露伴らしく、酒盗の食べ方が記されている。



○幸田露伴愛用 徳利とワイングラス（個人蔵）

晩酌に使用したものと伝わる。露伴は「酒仙」の異名をもつほど、酒を好んだ。



展覧会では、露伴の他にも尾崎紅葉、坪内逍遙、正岡子規などが鷗外に宛てた手紙を展示しています。近代文学の青春期の交流をご覧ください。

※画像の無断転用、転載はお断りいたします。